

第一諦（理の未遂不収）

人は理を以て現實を觀じ、解する、と措定・仮置きされている。

理は論を以て考概される。論は概念・言語を素材とする、と。

素材の最小単位である素粒子は、ただ、そうだからそうだとしか言えぬものにて、根拠なるべき説明の不可能な、ドクサ・決めつけ・思ひ込みでしかない。

論理によるならば、そういふこととなる。だが、そういふ展開（論、論理、思考の型）自体に妥當性の証明はない。

そもそも、妥當・正當・眞實といふ言語・概念の定義の妥當性・正當性・眞實性も未証明にて、妥當・正當・眞實が何たるかすらもわからぬ。

かやうに、理は理の機らしきを以て、躬ら破綻する。理を以て究めやうとすれば、根底に理なく、ドクサしかなく、理不盡で、我らは無条件無根拠な措定を礎として思考し、証し、解していることが露わとなる。

零から理によりて構築され、零から理により解析され、零から理によりて証せられるもの・ことはない。理自体がさういふやうに証する。

理は根拠を晰らかに証することを理に對しても求め、自己破綻する。躬らを以て躬らを破壊する。

理の範疇に於ひては。

すなわち、人は眞に究竟窮極なる眞實義を求め、未遂不収に陥るが、それはロゴスの戯れでしかない。

第二諦（超越のリアル）

そういふ不可能事に陥る根本原因は、生命の持つ根源構造、超越に由来する。

生命は、無限の超越であり、時間性の根源であり、常に自己を超越し、甦る。躬らを否定・破壊し、脱自して新たに生まれ変わり、進化する。

躬らの頭を踏んで跳躍し、天穹へと上昇する。

現実といふものは、無事平穏なときには、どこか虚しく、空々しく、仮・架空としか観ぜられず、リアルを、刺激を、新鮮を、生々しさを、鮮烈を、ヴィヴィッドを欣求して、飛翔超越したくなる。

我らの實存に真なる現實は、壓倒的な切實さ・切迫・迫真を以て、我々に存在を顯示し、非情、かつ、憐憫なき、絶壁の不動性を以て、他者として、客観性として、力づくを以て、我らを調伏し、納得させる。

唐突にて、理あらず。但し、理の範疇に於ひて、觀た眼上。

第三諦（眞の絶空）

空は空を絶ち、絶空である。絶空は、空といふかたちを遂げない。絶空といふ、かたちにも収まらぬ。さういふやうな結論にすらも。

これを非の原理という。非は非であるがゆゑに、非に非ず。躬らの尾を噛む原蛇。原蛇は喰らうか喰らわれるか。え答へず。

いかなるものとも對立しない。いかやうなる對立概念もない。そのやうな考概にすらも、収まらない。

全肯定とも言へるし、全否定でもある。全網羅でもあり、又はありとしあらゆる何もかも一切それそのものである。

ただし、それは全部を許し、全部を是認することに非ず。罪を赦さず、惡を憎み、理不盡を唾棄する。

なぜかといふならば、全肯定といふは「全肯定を否定する」ことをも肯定する肯定であり、「一部分しか肯定せず、他を否定する」ことをも肯定する肯定であり、「全肯定、かつ、全否定」に非ず、「全否定のみにありて、全肯定に非ず」であり、又、「一部肯定のみにありて、全肯定にも、全否定にも非ぬ」肯定にしあらば。

全否定・全網羅もまた同じ構造を持つ。

それゆゑ、現實が何の理もなく、この一つのかたちでしかないといふも、不可思議に非ず。宇宙の唐突なる開闢も理不盡に非ず。理も経緯もなく、唐突に、現實は、かたちである。

これを狂裂といふ。

これもまた理にしかず。觀た眼上の、理の範疇にしかず。別に構わぬ。どうあらうと差し支えなし。縷々語りたるも、甲斐なし。絶空も全肯定も全網羅も全く關係なし。さういふものは言辞にしかず。とてもかくても候。

途方もなき無際限の自由の極みにあり、自由奔裂、狂奔裂ともいふ。

それゆゑ、實際今この瞬間に眼前たるは、瞬今限前のごとくにあるらん。

これが絶空である。古来、色即是空といふは、妙言なる哉。

第四諦（聖八正道）

滔々と敷衍するも、いかばかりか。こころもとなし。虚し。儚し。甲斐なし。畢竟、有無是非なく、無味乾燥に現實に、眞究竟たる眞實義とは何か。

あきらけくすみあけくきよらさやかにかるるか。さやうなること。それが正しい。理由も、根拠も、経緯も、仕組もわからぬ。唐突。

只唯存す。只管爾焉（ひたすらこれたるのみ）。妙義としか言やうがない。